

僕が出会った ネイティブ



真砂秀朗(アーティスト)

降った雪が凍って西部劇に出てくるような道端に積もっている。空はどこまでも透きとおっている。・・・そんな外の世界とは、うって変わってクタビーチにあるような、内装のこのバーは、色々な人の言葉でうめつくされている。

一番奥のボックスがあいている。コヨーテカフェで夕食を終わった僕達は、サントフェの夜を楽しもうと、コーナリーの席にすわって店の中を眺めてみた。いろんな所から来ている観光客達の中にまじって目立った存在が居る。この店の常連達なのだろう。ドレッドがいる。たぶんカリブの方から流れついたんだらう。客人の中を渡り歩き話している彼は、この店の雰囲気をやわらかくしているように

見える。その横に、カウボーイハットにジーンズ姿の男がいる。毎日このカウスターに、こういうふうには酔っぱらって感じる。男がこちらを振り向いて、人ごしに目が合った。アメリカインディアンらしい、どこかで見覚えのある顔だ。一瞬思い出そうとした。・・・そうだ。自分にそっくりだ。・・・

突然、となりにあったデュークボックスからポップ・マリーリの歌声が鳴りひびいた。思わずうれしくなって体をゆする。気がつくとも男は僕のテーブルの前に立っていた。そっくりどころか、おんなじ顔。

そもそも今回の旅行は、インディア・フルート奏者のカルロス・ナカイに会うのが目的だった。8月のミュージック・オブ・ナーガへの出演をお願いする為だ。僕にとっては初めてのアメリカだ。思えば、ヒッピーカルチャー全盛のハイティーンの頃、初めて行く外国とし

て思いうかべるのは、アメリカしかなかった。でも、どういう訳かインドに行ってしまったから、アジア、アフリカそしてルーツとしての日本に意識は向かい、近代アメリカは、遠いところになってしまっていた。でもネイティブアメリカは自分にとっては、さけられないような、魂のところ、いつか会ってみたいところだった。

サウスウエストの旅の入口にあたるサントフェで、僕は自分と同じ顔の男と向き合って座っていた。男は、鼻・同じ。目・同じ。と指で自分と僕を差しながらジェスチャーしている。内心とてもうれしそうだ。

僕が話しかけても、彼は口ではしゃべらない。その代わり、机においた両手の最小限の動作と目で話しかけてくる。ああ、そうか。と僕は納得してきた。彼は気で話している。何となく浮かんでくる気持ちにしたがって僕は外を見る。男も外

を見る。とても騒々しい店の中と対称的な、窓の向こうの世界。澄みわたった、静かな、星々の光る世界の方に、2人はチューニングされているようだ。ああ、そうか、植物の世界だな。と思う。瞬間、窓ぎわにあった植物に、すっと男が手を触れる。・・・

そんな感じでお互い名前も知らぬまま、時を過ごし、とうとう最後まで一言も口をきかなかった。彼は自分のしていたベルトを差し出した。僕は毛糸の帽子を渡した。本当に嬉しそうに、ラブリーに彼はその帽子をかぶって見せた。

別れぎわに彼はまた、鼻・同じ。目・同じ。同じ顔。というジェスチャーをして、最後に両目の下と両耳を指で差した。「いいか、この感じ、忘れるな」というメッセージに思えた。ありがとうございませう。

正直いって空からサンフランシスコが見えた時、初めてのアメリカという感動

は何もなかった。それより、なんでこんなに砂漠になっているのか、ロスまで南下する間、砂漠しか見えない光景に何か驚きのようなものを感じた。しかし、その夜サンタフェで、やっとネイティブアメリカンに出会えた気が僕にはしていた。



ガタガタ道に揺られながら車の窓から見える景色は褐色の巨大な岩が作る物語的な形と、どこまでも青い空だけだ。ハイウェイを降りたアメリカ・サウスウェストは、インドのデカンや、アフリカのマリで見た景色とそれ程かわらない様に

僕には思える。そこにドゴンの人が居ても違和感はないだろう。

アメリカインディアンと呼ばれた人々とドゴンと、日本の弥生人達との間にどれだけのちがいがあろうか。そう言えばドゴン族の村に行った時、弥生人の村は、こんな感じだったのだろうか。タイムスリップしたような気持ちになったことを僕は思い出した。また、もっとさかのばれば、ドゴン族以前にそこに住んでいたピグミーと呼ばれる人達。ナヴァホやアパッチ以前にこの大地に居たアナサジと呼ばれる人々、そして日本では縄文人という種々雑多な部族達。さかのばればさかのぼる程、人間は顔かたちも、文化的にも共通性をもっていたような気がしてくる。と言うより、それは文化以前の文化であり、言葉以前の言葉に人々が身をゆだねていたということ。

ツアーガイドのフィリップとアシスタントのフィルにとって僕は初めての日



本人ツーリストである。白人の彼等がこの仕事をしているのは、アメリカに生まれた彼等なりにネイティブとつき合って生きたいからだ。プロフェッショナルな彼等に身をまかせて行く先は、チャコキヤニオンという所。2日間、キャンプをする予定だ。どこまでも広がる岩と空の景色は、ここがどこであるという名前をつけがたい。惑星というのがふさわしい。

チャコキヤニオンはそれこそ天然の惑星基地という感じで、回りを50メートル位の高さの崖に囲まれた広大な平地で、真中に川が流れている。川の両側に何十もの古代遺跡が半分埋もれている。その中のいくつかは掘りおこして再成されているが、そのひとつひとつの建物が4階もあるような、石を積んで造ったピルなのだ。かつてアナサジと呼ばれる人々が何の為にここに住んでいたのか解っていない。

ポールさんは僕達より先にキャンプ場に来ていた。彼はここから車で数時間のところに馬をかって暮らしているネイティブだ。ナヴァホに属し、代々ハーブマンをしている。

フィリップがコーディネートしてくれていたのだ。昼間は20度位、夜はマイナス10度まで下がる気温差、年間でも雨が降るのはふたつき位という苛酷なところだが、よく見ると、いろんな植物が生きている。どれも初めて見るものばかりだ。ポールさんは皆を連れて、トレッキングしながら、植物のひとつひとつの使い方を説明してくれる。少し先まわりをしては、ここに水晶の鉱脈がある、とか、この小さな水たまりの中に9種類の植物が共生している、とか、いった具合にこの砂漠の中でも微妙な、豊かな世界を見せてくれるのだ。

サンセットタイムになると一面の褐色は一面のゴールドとオレンジ色のパノラ

マに変わり始める。ポールさんは左手を沈んでゆくお口様に向けて祈りを始める。我々も横に並んで祈る。

夜、火を囲んで歌った日本の民謡をポールさんはとても気に入ってくれたようだ。笑ってしまいう位寒い夜を過ごし、別れる朝、立ち話をしてしていると、ふと彼はシャツをめくって胸を出して見せた。そこにはサンダンスの傷あとがくっきりとついていて、「ブラザー」、彼は軽い一言で別れを告げ手を差し出した。「リスバクト」と言って僕も手を出した。



フィリップに感謝すべき1週間のサウスウェストトリップを終えて、僕達はレンタカーを借り、アメリカのハイウェイを走っていた。今までは見たこともないようなダイナミックな夕焼けの中を、ツーソンに向かって、カルロス・ナカイに会いに行く為に。